

## ■■ おとら狐の後日譚 ■■ ===⇒おとら狐の話

石塚さんが憑きものの特集号を出すから、長篠のおとら狐の後日譚を書けとのおすすめである。ずいぶんと昔のことで、中山太郎さんの手を通してあの話を柳田先生の許に差し出してからかれこれ三五、六年になる。大正九年に『おとら狐の話』が出てから、その後の調査を加えて書き直したが、その原稿も今は行方はわからぬ。そのとき新たに加えた資料が三つ四つあったが、その主人公が妙なことに、他郷の、ことに名古屋や豊橋へ出て行ったのが、事業に失敗したり不縁になって里に還っている人たちであった。その中の一人はまだ若い女で、その家を私も知っている。自分の口から俺はおとらだと主張して始末に負えぬ。家人が御岳講の先達を頼んできて祈禱をやってもどうしても落ちぬ。先達の帰った後で女が言うには、彼奴が来るとうるさいから、その間橋場の降り口の休み処の石に腰かけて待っていたなどと語ったそうである。橋場というのは、以前橋のあった場所で、その頃橋はもうなかったが、休み処だけは昔のままに残っていた。長篠古城址の近くである。

見方によると、私が『おとら狐の話』を書いた時あたりを境に、おとら狐の噂は消えたように思うが、村を出て他郷で暮らしていた人たちには、以前の生活が心のどこかに残っていて、何かのキッカケで蘇ったものと思われる。しかし今はもうおとらも完全に過去の物語になって、同じような現象が仮に起こっても誰も耳を傾けようとはしないであろう。

おとら狐もずいぶんと古いもので、前身は長篠城の鎮守の稲荷であったが、城が廃止になってから流浪して、川中島合戦に流れ矢に左の眼を射られたとか、狩人に向こう岸から狙われて足を撃たれビッコになった、あるいはそこで死んだともいう。その一方には、郷土の林某の矢に中ってたしかに死んだ、享保年間に古城址に近い字西組のものが伏見稲荷を勧請してともに祀ったというから、問題は一応解決している。しかも依然人に憑くので、今のは娘のおさだだの孫娘だのと噂も出たのである。

実を言うと私なども郷里を後にするに至った理由の一つは、おとら狐にあるように思う。ちょっと風邪を引いても直ぐおとらが憑いたと言って、余り交渉を持ちたくない祈禱師などを頼まねばならぬ。それがやりきれなかった。それには二三歳で亡くなった長姉におとらが憑いているという噂も大きに関係している。ついには附近の人たちの勧めで、遠州の山住さんを迎えて座敷の床の間に祀った。その翌日姉は亡くなったが、もともと肺を患っていたのだから、当時としては助かる見込みは

ないのだが、それが時もあろうに山住さんを迎えた翌日であった。山住さんお迎えすればおとらは離れるが命はないと言われていたから、言わば最後の手段でもあったのだ。

当時、山住さんを迎えることなど、何も聞かされていなかった私は、二里ほど離れた村の叔父が、草鞋ばきで妙に強ばった顔をして、隣家の婿と一緒に家の石段を上って来たのに驚いた。叔父は家の大戸には掛らないで、座敷の縁近く進んで、「お出でになったゾヨー」とやや声高に叫んだものである。その時母が襷を外しながら小走りに出て、座敷の障子をサッと左右に開いた光景が今もはっきり目にある。

その威力あらたかな山住さんも、終戦後の農地改革その他で時世には勝てず、見事な千年来の森も伐り払われたというから、昔のような威力は発揮出来ないかも知れぬ。また、おとら狐には好い相手であった御岳講の行者もとっくに死んで、二代目は信心深いが農業のほうが一段熱心だという。

